

## 「2023年度インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 伊東 柚香

## 〈学習成果〉

今回参加したインドネシア大学スプリングスクールでは、インドネシア語の基礎を習得し、現地の学生との共同発表や実地研修などを通じてインドネシアの文化や社会についての理解を深めることができました。しかし、日常会話のインドネシア語の難しさやインドネシアにおける宗教についての自分の知識の浅さにも直面することになった。このように自分に足りない点を自覚することになった経験から、今後の学習の目標が明確になり学習意欲がさらに高まった。そしてインドネシア以外の国についても興味が湧き、今回の短期派遣プログラムの反省を生かして次は日本と長年にわたる交流の歴史をもつタイでチュラーロンコーン大学のサマースクールに参加したいと考えるようになった。

## 〈海外での経験・プログラム内容〉

プログラムでは、主に午前中にインドネシア語講座を受講した。その講座では自己紹介や道案内、時間などの基礎的な表現を学習したが、実際に学んだ表現を使う機会も得られて刺激的だった。特に印象に残っているのは、インドネシア語で学生や事務員の方にインタビューをしたり、ショッピングモールで値下げ交渉をしたりするというタスクだった。教科書で学んだ表現を使って話しても、相手は教科書に出てくるような表現では話さないことも多く、それに即座に対応していくのが難しかった。そのため、今後は語学において口語表現の学習にも力を入れていく必要性を感じた。

また、現地の人々とのやりとりのなかで、たどたどしいインドネシア語であっても私がインドネシア語で話そうとすると、相手が喜んで理解しようと耳を傾けてくれたことや、逆に私に対して相手が知っている日本語を少し使ってくれたことをうれしく感じたことがしばしばあった。こうした経験から、現地語を使ってコミュニケーションを取ろうとすることは相手が誇りに思っている母語を尊重して理解しようとしている態度として受け取られるのではないかと感じ、英語以外に現地語を学ぶ意義を再確認した。

午後には主に最終日に行われる共同発表の準備を現地の学生と行った。私のグループは日本の民話『三枚のお札』とインドネシアの民話『Timun Mas』を比較し、その民話から読み取れる両国の文化や宗教、自然環境について発表した。その発表準備の話し合いのなかで、インドネシアにおける宗教についての考えが深まったことが私にとって大きな収穫だった。これまで私はインドネシアの宗教と言えばほとんどがイスラム教という捉え方しかできていなかった。しかし、それは宗教というものを創唱宗教という狭い意味で考えていたからだ気づいた。自然宗教も含めて考えたときインドネシアも日本と同様アニミズムが広くみられ、原始的な部分では宗教的な共通点があるということを知った。インドネシアの宗教の一面しか見えていなかったため、インドネシアの宗教の多様性についても今後深く知りたい。

## 〈進路への影響〉

今回の短期派遣プログラムでの経験を通して、将来働くにあたって国際理解の促進に貢献したいという気持ちが強まった。私はこれまで大学卒業後は大学事務職員として働き、幅広く学生生活を支援したいと考えていた。しかし、今回短期派遣プログラムに参加して国際理解への意欲が高まるような貴重な経験を得られたことで、大学事務職員として特に国際交流に携わり、国際理解に関心を持つ学生を増やして支援したいと考えるようになった。

&lt;事務局使用欄&gt; 受付番号:

-

た。もちろん直接的に国際交流の職務に携わる以外にもさまざまなアプローチの仕方があるが、どのような仕事をするにせよ国際理解の促進にどう貢献できるかということも考えながら働きたいと思えるような経験になった。